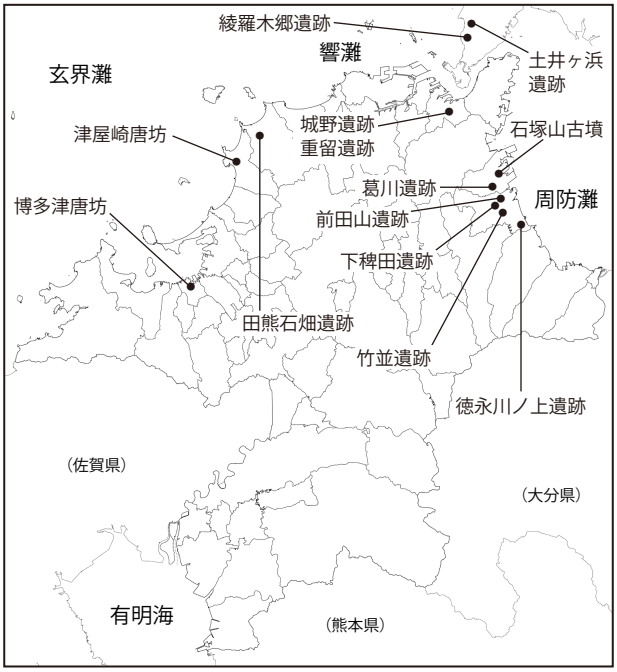
令和４年度パネル展(会期：令和４年12月６日(火)～令和５年２月26日(日))

筑紫・豊(前)の四つの窓(前編)

1　福岡県の四つの窓

かつて筑紫・豊（前）と呼ばれていた福岡県は、その三方に海が開かれています。北の玄界灘と響灘、東の周防灘、そして南の有明海です。福岡県域の人々は古代より、この四つの海を通して各地とつながっていました。筑前沿岸部では玄界灘から壱岐・対馬島を経て、朝鮮半島や中国大陸と、また響灘から日本海沿岸部とそれぞれ通じていました。一方、筑後は有明海の沿岸諸地域と交流するにとどまらず、中国大陸への海路が開かれていた可能性も考えられます。そして周防灘に面した豊前は、瀬戸内海を経て大阪湾から近畿地方に通じていました。近年、江戸時代の国際関係について、従来の「鎖国」ではなく、「四つの窓」（長崎口、松前口、薩摩口、対馬口）を通した交流が注目されていますが、福岡県の四つの海も、古代から内外各地との交流窓口の機能も果たした、「四つの窓」といえるでしょう。

本展では、この四つの窓に面した遺跡と、そこから浮かび上がる古代の交流の姿を、２回シリーズで紹介します。前編では、玄界灘、響灘に関する遺跡と、周防灘に面した地域の遺跡の一部を見ていきます。



四つの海と本展紹介の遺跡

2　響灘

まずは日本海側の響灘沿岸の遺跡を、同じく響灘に面した山口県の遺跡も交えて見てみましょう。下関市の綾羅木郷遺跡は、弥生時代の代表的遺跡として知られますが、発掘調査からは大量の弥生時代前期土器などに加え、日本で初めて土笛（陶塤（とうけん））が出土しました。陶塤は、福津市の香葉（かば）遺跡が分布上の西限で、東は出雲を経て丹後へ、日本海沿岸ルートを伝わっています。同じく下関市の土井ヶ浜遺跡からは、墓地の副葬品として南海産の貝を用いた貝製腕輪が出土しています。南海産の貝は、北部九州や山口県に加えて、遠くは北海道まで運ばれており、響灘からつながる日本海沿岸ルートが貝の道でもあったことを示しています。

次に北九州市域の遺跡を見てみましょう。中国の歴史書によると、かつて倭国と呼ばれていた弥生時代後半期の日本列島には、数多くの国々がありました。ここでいう国とは、後の律令時代に郡と呼ばれる地域単位とほぼ対応します。北九州市域でも、紫川流域に聞（きく）（のち企救）郡規模の国がありました。北九州市の城野遺跡は、その聞（企救）国の国邑（こくゆう）、つまり都の遺跡とも考えられます。また城野遺跡の近くに立地する重留遺跡も、聞（企救）国を想定した場合、その国を構成する集落群の中では大規模な遺跡といえます。重留遺跡では、大形の竪穴建物の壁際に掘られた土坑から、広形銅矛が出土して注目されました。

重留遺跡から出土した広形銅矛

3　玄界灘

響灘から続く海は、宗像市付近で玄界灘となります。その宗像市域で発見されたのが、弥生時代前期後半から中期を中心に営まれた集落遺跡・田熊石畑遺跡です。遺跡は昭和初期に発見され、2007（平成19）年から再び行われた発掘調査では、弥生時代中期前半頃（紀元前２世紀）の木棺墓が９基検出されました。そのうちの６基からは剣・矛・戈といった青銅製武器が合計15本も出土します。たとえば１号墓からは銅剣4本と銅戈１本が出土し、さらに管玉26点と垂飾品２点も副葬されていました。田熊石畑遺跡の墓域出土品は、後に国の重要文化財に指定されています。

田熊石畑遺跡では、古墳時代後期、６世紀後半から７世紀初頭の掘立柱倉庫建物25棟なども検出されています。遺跡の重要性と保存運動の結果、遺跡地は保存されることになり、国史跡にも指定されました。

玄界灘を渡った商人の姿も、遺跡から見ることができます。中世、当時の博多津には、綱首・綱司と呼ばれた中国人貿易商の居住区があり、唐坊や大唐街と呼ばれていました。福津市の津屋崎にも、津屋崎千軒と呼ばれた港町がありましたが、近隣の在自西ノ跡（あらじにしあと）遺跡では、多量の中国陶磁器が出土しています。その中から綱首の存在をうかがわせる「綱」の墨書が認められ、近くには「唐坊地」の地名が残ることから、津屋崎千軒にも唐坊があった可能性が高まっています。

4　周防灘

周防灘の沿岸部からは、弥生・古墳時代の遺跡を紹介します。行橋市の竹並（たけなみ）遺跡は、弥生時代前期後葉から中期前葉の遺跡で、竪穴住居・掘立柱建物・貯蔵穴・土坑などからなる集落と、墓地群が検出されました。下稗田遺跡でも、弥生時代前期中葉から後期末の集落や墓地が見つかりました。特に朝鮮半島南部系の松菊里（しょうきくり）型竪穴住居などの検出は貴重な成果です。

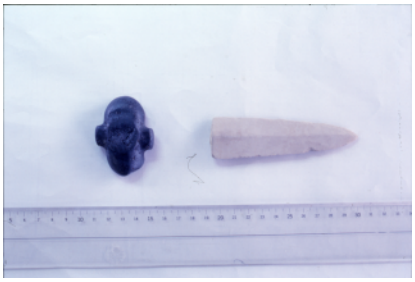
朝鮮（ソンガン）半島系の遺物が出土した遺跡には、行橋市の前田山遺跡もあります。弥生時代前期～後期の集落跡と墓地群、古墳時代後期の横穴墓群などが検出されましたが、朝鮮半島系の武器として、弥生時代前期の磨製石剣も出土しています。苅田町の葛川遺跡は弥生時代前期中葉の環濠集落が完掘されたことで知られる遺跡ですが、在地の弥生土器に混じって、朝鮮半島南部系の無文土器が出土して注目されました。

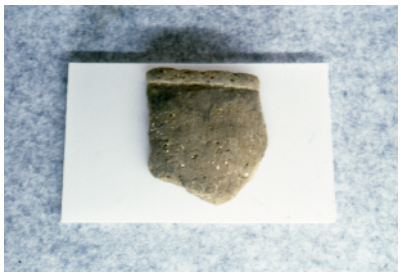
舶来の鏡については、みやこ町の徳永川ノ上遺跡が挙げられます。旧石器時代から中世にかけての複合遺跡ですが、弥生時代終末期の墳墓群から中国・後漢の舶載鏡のほか、小形仿製鏡など６面の銅鏡が出土しました。苅田町の石塚山古墳でも、江戸時代に舶載の三角縁神獣鏡が14面出土しました。なお石塚山古墳では1987（昭和62）年の発掘で、素環頭大刀・銅鏃（ぞく）・鉄冑小札などの武器・武具も出土しています。

（執筆：名誉館長　　西谷　正）
（編集：文化財企画推進室　渡部邦昭）

田熊石畑遺跡・一号木棺墓の出土状況

下稗田遺跡の墓地の様子


前田山遺跡出土の磨製石剣


葛川遺跡出土の無文土器

石塚山古墳の竪穴式石室基底部

編集　　発行：令和４年12月6日
九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM
〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575　FAX 0942-75-7834
URL https://kyureki.jp